

環境政治学序説(4)

A Preface to Environmental Politics

山口裕司

本稿は、環境政治学のアメリカの事例として、作家かつ海洋生物学者のレイチェル・カーソンを取り上げる。特に彼女の最も影響を及ぼした著書『沈黙の春』とその思想、環境政治学的意義を中心にまとめる。

彼女の死の直前に出版された『沈黙の春』は後の様々な人物も感化を受けた。その一人が米国クリントン政権の副大統領を務めたアル・ゴアである。彼は後に地球温暖化問題への取り組みが評価され、ノーベル平和賞を受賞した。

本稿ではこうした政治家、特にJ・F・ケネディへの影響も含め、環境政治学的にカーソンにアプローチする。

キーワード：レイチェル・カーソン、「沈黙の春」、アメリカ環境政治

目次

- I はじめに
- II 環境問題の定義と歴史
- III 環境政治学の定義と特色 (以上、第19巻第1号)
- IV 環境問題をめぐる思想と運動
- V 環境問題と政治 (日米独) (以上、第20巻第1号)
- VI 田中正造 (日本) (第23巻第1号)
- VII レイチェル・カーソン (アメリカ) (本号)
- VIII 緑の党 (ドイツ)
- IX おわりに

VII レイチェル・カーソン (アメリカ)

本稿は、『沈黙の春』でアメリカの農薬汚染の実態を暴いたレイチェル・カーソンにスポットを当て、彼女の経歴、その著『沈黙の春』の影響、彼女の環境思想、そして彼女の環境政治学的意義について述べたい。環境政治学的アプローチとしては、その射程はナショナルな分野になる。

1 経歴

レイチェル・カーソン (Rachel Carson) は、1907年5月27日に米国ペンシルベニア州のスプリングデールに生まれた。

1924年にペンシルベニア女子大学 (現チャタムカレッジ) に入学し、メリー・スキンカー教授の「生物学」に興味を示し、動植物の野外観察を好んだ。

その後1928年にジョンズ・ホプキンス大学大学院に入学し、発生遺伝学を専攻し、修士論文は「ナマズの胚子および仔魚期における前腎の発達」というテーマだった。

1936年には公務員試験にトップで合格し、商務省漁業局に水産生物学者として採用された。太平洋戦争が始まった1941年には作家としての活動を開始した。同年11月『潮風の下で』を出版した。6年間で1600部が売れ、専門家は同書を評価した。1949年に内務省の魚類・野生生物局の水中調査に参加し、初めて海にもぐった。

1951年に出版された『われらをめぐる海』はよく売れて、86週ベストセラーとなり、33カ国語に翻訳され、全米ノンフィクション賞を受賞した。ちなみに同書によって知名度を得たカーソンの『潮風の下で』は再版されベストセラーとなった。

作家としての評価を獲得したカーソンは、1952年魚類・野生生物局を退職し、文筆活動に専念することになった。そして1955年に出版した『海辺』は23週ベストセラーになった。

1957年、友人のオルガ・ハギンズ夫人から手紙が寄せられた。内容は DDT 散布による多数の鳥の死であった。

1958年には4年後に完成することになる『沈黙の春』の執筆を開始する。しかし母マリアが死去し執筆活動が遅れた。

1960年には胸部にガンが見つかり放射線治療を開始する。カーソンは病気のカatalogともいわれ、リウマチ、心臓発作、インフルエンザなど多くの病気に罹患した。

1961年、病状は好くならず彼女は寝たきりとなる。

1962年には、『沈黙の春』が雑誌「ニューヨーカー」に連載され始める。同年、『沈黙の春』が単行本として発行され、発売初日だけで4万部が売れ、全米に大きな反響を呼んだ。ちなみに同書を仕上げた日の夜、ベートーベンの「バイオリン協奏曲」を聴いていたということである。

1963年、すなわちケネディ大統領が暗殺された年、大統領科学諮問委員会の科学技術特別委員会が農薬委員会を設置した。同委員会は報告書「農薬の使用」を公表した。その中で農薬企業と農務省を批判し、カーソンの調査の科学的正確性を評価した。さらに環境破壊に関する上院委員会公聴会が開始され、カーソンは車椅子で証言した。

1964年4月14日、カーソンはメリーランド州シルヴァー・スプリングで死去した (56歳)。翌年には『センス・オブ・ワンダー』が最後の著作として出版された。

レイチェル・カーソン 略年表

1907年	ペンシルベニア州スプリングデールで生まれる
1925年	ペンシルベニア女子大学(ピッツバーグ)に入学(英文学専攻、後に生物学専攻)
1929年	ジョンズ・ホプキンス大学大学院(ボルチモア)に入学(生物学専攻)
1936年	公務員試験に合格し漁業局に正式採用される
1941年	『潮風の下で』出版
1949年	魚類野生生物局の水中調査に参加し、初めて海にもぐる
1951年	『われらをめぐる海』出版(ベストセラー)
1952年	『潮風の下で』再刊(ベストセラー)。魚類野生生物局を退職し文筆活動に専念
1955年	『海辺』出版(ベストセラー)
1956年	米農務省の指導の下に、マイマイガ根絶のためDDTの大量空中散布実施
1957年	DDT散布による被害を訴える(オルガ・ハキンズからの)手紙を受け取る
1958年	『沈黙の春』の執筆開始。母マリアの死去
1960年	ガンが発見され放射線治療へ
1962年	『沈黙の春』が「ニュー Yorker」誌に連載。同年単行本出版(大ベストセラー)。ケネディ大統領が記者会見でカーソンの著作に触れる
1963年	大統領科学諮問委員会の科学技術特別委員会が農薬委員会を設置。同委員会が報告書「農薬の使用」を公表。環境破壊に関する上院委員会で公聴会が開始され、同委員会で証言する
1964年	メリーランド州シルヴァー・スプリングで死去(56歳)
1965年	『センス・オブ・ワンダー』出版

(参考文献) 太田哲男『レイチェル=カーソン』清水書院、1997年。上岡克己ほか編著『レイチェル・カーソン』ミネルヴァ書房、2007年。

2 『沈黙の春』の影響

まず、カーソンがその後の環境政治史に多大な影響を及ぼした『沈黙の春』について述べる。第一に、1961年、民主党のJ・F・ケネディが第35代大統領に就任した。冷戦関係にある米ソ両国の緊張がたかまっているなかで、ケネディへの国民の期待が集まった。宇宙開発でソ連に遅れをとり、カリブ海ではキューバに革命政権が登場した。一方、アフリカには次々に独立新興国が成立し、アジアではベトナム情勢が不穏になっていた。欧州ではベルリンの壁が作られた。東側では二つの大国であるソ連と中国の対立が表面化するなど、世界は不安定な状況におかれていた。

1962年、海洋学者で作家のレイチェル・カーソンが『沈黙の春』を出版したのは、そういう時期だった。カーソンは問題を化学薬品と農薬に絞り、豊富なデータを使って、薬品づけになっているアメリカの文明生活に鋭い警告を発した。

出版は大きな反響を呼び、半年で50万部を売り尽くすというブームとなった。しかし化学薬品業界を中心に反発が起き、『沈黙の春』は非科学的と非難され、カーソンは「ヒステリー女」と罵られた。しかしアシスタントとともに4年間調査したデータは正確で、一年もたたないうちに反論は消え、政府も『沈黙の春』で指摘された問題点の改善に乗り出し始めた。ケネディ大統領も同書を読んで感激し、ホワイトハウスで環境保全会議を開いた。そしてマサチューセッツ州のケープゴッドを国立海岸に指定するなど、環境保全に力を入れた。

この本は8年後に全米を揺るがす「アース・デー」の発端となり、それがまたストックホルム国連人間環境会議を呼び起こし、さらに国連環境計画の設立に結びついていく¹。

第二に「環境革命」としての『沈黙の春』について述べる。環境革命の開始を告げるものとしてカーソンの『沈黙の春』がある。合成化学殺虫剤の乱用が招いた影響を詳細に述べ、多くの論争を呼び起こすとともに、人間活動が環境に及ぼす意味、そしてそれが人間社会へ跳ね返ってくる代償について、一般の関心を高めた。

カーソンは、1951年の『われらをめぐる海』、1955年の『海辺で』で作家としての名声を確立した。一方『沈黙の春』は両作品とは異なり、自然に向けられた脅威を観察するところから生まれた。

カーソンは「核戦争の脅威とは別に、私たちの時代の最大の問題は途方もない危険性を秘めた物質による環境の汚染だ。たまたま食品を汚染したわずかな量の毒物ではなく、全人類の環境を持続的継続的に毒している化学物質をこそ、私たちは直視しなければならない」と述べている。また彼女は「化学殺虫剤の使用は、環境自身の自然の防衛力を妨げている。無差別に散布された化学物質が、複雑な生物のシステムにおよぼす影響を事前に考慮することなくその使用を許可したことは、自然にとっては自滅を意味した」とも警告した²。

カーソンの最大の関心は、1939年にその殺虫特性が見つかったDDTにあった。DDTは安価で簡単に製造できたので、環境への影響が研究される前に、万能殺虫剤として歓迎され、新しい化学殺虫剤のなかでもっとも普及した。『沈黙の春』は、難分解性殺虫剤が環境に及ぼす影響を最初に警告したものではなかった。それ以前に『ニューヨーカー』誌などがその危険性を述べていた。

カーソンも『リーダーズ・ダイジェスト』誌に、DDTに関する文章を寄稿したが、掲載されなかった。それと『沈黙の春』との違いは、『沈黙の春』のメッセージ性が明快で直接的なことであり、環境に対して一般大衆が新たに抱くようになった関心と一致するものがあつた。出版前に『ニューヨーカー』誌に連載されたことで評判を呼び、またたく間にベストセラーとなり、1963年には15か国語で出版された。

カーソンはアメリカ農務省や化学会社からの攻撃や批判を浴びた。しかし、ケネディ大統領は深く感銘して、1962年8月の記者会見でカーソンの著作に言及するとともに、科学顧問に殺虫剤問題を調査するように要請した。大統領科学諮問委員会に特別委員会が設置され、1963年5月に殺虫剤業界や連邦政府を批判する報告書が公表された。

『サイエンス』誌によれば、この報告書は、『沈黙の春』を徹底して擁護した。大統領特別委

員会がカーソンの説を立証したことで論争は一変し、殺虫剤問題をだれも否定できなくなった。

『沈黙の春』の影響力の背景には何があるのだろうか。道徳主義と論争の組み合わせ、殺虫剤問題を学問領域や科学専門誌から一般の関心へと移転させた効果、などがある。殺虫剤に関する従来の著作は経済用語で記述されたが、同書は実質的に生態学の文献であり、人々にショックを与えて化学殺虫剤の乱用への反対行動を引き起こすことに狙いがあった³。

第三に『沈黙の春』の先駆性についてである。『沈黙の春』の意義は何か。それは農薬汚染の問題、合成農薬が引き起こす波紋に関して、筋が通り、理にかなった広範囲の説明を、先駆的に与えたことにある。環境保全のために、一定の枠内ではあれ、各国政府は法的な規制を加えるようになったが、カーソンはその動向にきっかけを与えた先駆者だといえる。それに加えて、『沈黙の春』が提起した論理は、「エコロジー的方法」とでもいえるが、これ自体が大きな意義を持っている⁴。

第四に「環境を改変する技術の発展」についてである。アメリカにおいて1960年代半ばまでに、それまで一世紀以上の間続いてきた、近代社会と科学技術の良好な関係が冷め始めていた。カーソンの著書『沈黙の春』は、科学技術の見境のない乱用が引き起こす悪影響を論じた多くの書物のなかで、最も広く知られたものになった⁵。

3 カーソンの環境思想

それでは、カーソンの環境思想とはどういうものだったのだろうか。いくつかの点にまとめる。

第一に『沈黙の春』の登場との関連である。第二次世界大戦後の環境思想史において先鞭をつけたのは、カーソンであった。実際には、それ以前から環境問題に警鐘を鳴らしている人々は存在していた。しかしそうした著作は一般的な関心をそれほどひかなかった。カーソン以降、環境問題への一般的認識が高まり、各種の環境思想・エコロジー思想が台頭する。自然に対する有機体論的アプローチをとった点でも、汚染による自然破壊を認識させた点でも、カーソンこそが現代における環境主義・エコロジー思想の出発点といってよい。

『沈黙の春』のさらに重要な点は最後の一節の次の部分に書かれているとの見方がある。「自然のコントロールという思い上がった言葉は、自然が人間のために存在すると考えられていた生物学および哲学のネアンデルタール時代のためものである」⁶。自然という世界像の中で人間がどういう位置にいるのかについてカーソンは警鐘を鳴らしているが、それを知らないという生態学的無知は、哲学的な未熟からくるものにほかならない。この点でも、カーソンは現代環境主義の源流に位置することになる。いわゆる環境主義全般だけでなく、生態中心主義も『沈黙の春』から派生した⁷。

第二に、いわば「歴史的アンソロジー」である。ナッシュは『アメリカの環境主義』という文献のなかで、アメリカの環境思想を歴史的にフォローしている。ちなみに、「アメリカ環境史年表」の冒頭は、1626年の「プリマス植民地が植民地内での木材の伐採、および販売を規制する条例を制定」で始まる。

環境思想の起源から現在までを、ナッシュは5つに区分する。第1期は「保全の衝動」であり、当初から1878年まで、第2期は「革新主義的保全運動」で1901年から1910年まで、第3期は「資源と環境の質の保全」で1921年から1965年まで、第4期は「生態学の福音」で1962年から1972年まで、そして第5期は「新たな環境主義」で1973年から1990年まで、である。

カーソンに関しては第4期の冒頭で「殺虫剤」との関連で描かれている。もちろん、『沈黙の春』の内容を要約しながらカーソンの「殺虫剤」に関する主張を紹介している⁸。

第三に、現代環境主義思想の萌芽としての『沈黙の春』である。アメリカにおける環境運動が自然環境保護（保存）運動・自然環境保全運動、といった自然環境に対する人間中心主義的な考え方から環境自体に目を向けるようになった契機は、カーソンの『沈黙の春』にある。農業・林業等で使用される除草剤や防虫剤等の有毒物質が自然環境や人間の生命・環境に与える影響の大きさについて、化学者の実証的研究成果から、指摘した。

これに対して、政府や薬品業界等はカーソンに様々な批判を行ったが、従来の自然環境保護（保全）運動に科学的な研究成果を踏まえて、環境汚染という新たな問題を提起したことは意義深いことである。その結果、環境運動家や一般大衆は環境問題の本質をその人間中心主義性にあるととらえ、それに基づいた自然観を脱却していく様々な環境思想が登場した。

これまでの環境思想は自然環境の保護や保存を目的とした環境概念だったのに対して、自然環境の破壊が公害問題や環境問題を生み出した結果、自然環境の保護（保存）思想や保全思想という伝統的環境思想に加えて、総合的環境（自然環境と人間環境）を破壊から守っていくことを目指す思想へと変容したことである。換言すれば、環境思想の目的が文化的エコロジー思想としての自然環境審美主義（保護・保存）、天然資源管理主義（保全）から、公害問題や環境問題を社会問題的な側面から解決していくための、政治的エコロジー思想へと変容してきたことを示している⁹。

第四に「環境保護思想」である。ある考え方を成功に結び付けるためには、偉大な情報発信者たちの力を必要とする。環境保護主義を先導した最も効果的な立役者は、鋭いペンの力をもつアメリカの海洋生物学者カーソンだった。もし別の時代だったら、カーソンの考え方は無視されたかもしれない。実際はそうではなく、彼女と彼女のような何百人もの人たちは、多数の賛同者や信奉者を生み出した¹⁰。

第五にドブソン流カーソン観についてである。我々は、そのイデオロギーの歴史的な位置を認識することによって、そのイデオロギーが何であるかを理解することができる。我々はある境界を手にしているのであり、その境界の向こう側には過去においてエコロジズムは存在しえなかったはずなのである。したがって境界の向こう側にあるどんな運動、理念も、我々がそのように理解するべきであると、考えられているようなエコロジズムに対して、それを啓発するような関係しかもつことができない。それゆえ、カーソンの『沈黙の春』は、同書が提起している様々な問題を扱うための包括的な政治的戦略を欠くために、エコロジズム自体「である」ことはできず、

エコロジズムを啓発するだけなのである。ドブソンの見解では、1962年にはエコロジズムは存在していなかったし、『沈黙の春』とその本の書かれた時期は、エコロジズムにとっての前提条件の一部であると理解するべきであると¹¹。

第六に「環境思想家カーソン」についてである。カーソンの自然を扱う著作は、感受性、複雑さ、そして深さのゆえに称賛されてきた。彼女は海の生物について教えたが、それはまた、いかに少ししか知られていないかについて敬意を払い続けるためでもあった。彼女は知るための別の方法（自然を感じることに）向かうための教育を行った。そして最終的に彼女は、自然について問いを発しただけでなく、我々がそれにより自然を知るその知識の本性についての問いをも発した。

カーソンの質的に異なる著作活動が行われる段階は、1956年に彼女が『婦人の友』に「子供たちが（自然に関して）驚きを感じるように援助しなさい」という論文を書いたときに始まった。その後『沈黙の春』を出版するまでの7年間、作品として本を出版しなかった。彼女はしばらく海から離れたと思った。彼女は同論文を将来一冊の本に仕上げたいと思っていたが、まもなく殺虫剤に関する調査を始めることになり、その論文を仕上げることはなかった。その論文は彼女の死後に『センス・オブ・ワンダー』という本として出版された。

『沈黙の春』は、環境主義における独創的な仕事であり、20世紀における最も重要な本の一つと見なされる。カーソンの環境哲学は、自然の本性と自然についての人間の知識の本性に関する問いを提出する。彼女の哲学は、人間の価値観と態度に自然が及ぼしている深い影響への感嘆の気持ちを、我々が持ち続けるよう読者を誘う。そしてそれは、自然の破壊を止めるよう、人々に責任の自覚を要求する。実際、環境思想の最近の歴史は、この優れた科学者、作家、教育者、先達かつ自然の愛好家の知恵に負うところが極めて大きい¹²。

第七に、『沈黙の春』出版の衝撃についてである。著しく男性優位の分野でありながら、アメリカ人の倫理の拡大にもっとも大きな影響を与えた二冊の本は女性の著作であった。ひとつは、ハリエット・ビーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』（1852年）、もうひとつはカーソンのそれだった。

カーソンは従来アメリカ人がもっていた思い込みを吹き飛ばす本を書いた。『沈黙の春』の出版は、生態学的思考の発展において画期的な出来事だった。そして新しい環境主義を加速させ、それまででもっとも多くの人々に環境倫理学について考えさせた本だった。

『沈黙の春』のなかで展開された倫理哲学には、古い思想と新しい思想が交錯している。カーソンはこの本を通じて、アメリカ人に衝撃を与え、目覚めさせ、行動を起こさせるつもりだった。彼女は憤慨していた。彼女の目標は、殺虫剤の禁止、少なくとも使用の大幅な規制だった。ミューアとレオポルドのように、政治の舞台に影響を与えたいと思っていた。もちろん、世論より先に進みすぎると自分の支持者を失うおそれがあるのもわかっていた。したがって、『沈黙の春』では、虫、鳥、魚をはじめとした毒の犠牲者の権利については述べていない¹³。

第八に「カーソンの位置」についてである。『沈黙の春』には、伝統的な人間中心主義が多くみられる。たとえば、昆虫の世界を人類の「友」と「敵」に分割する手法にそれがみられる。しかしカーソンにはもう一面がある。彼女の本の中にある人間中心主義的思想のもとにかすかに隠れ、個人的な手紙や公のスピーチではかなり明確な形で表れている考え方には、はるかに広い倫理的な視野が見られる。『沈黙の春』の執筆を始めたとき、編集者にあてた報告がある。「人間の健康に脅威となるものをとくに強調することが常に私の意図してきたところであるが、殺虫剤によってすべての生き物の基本的な生態系が壊されることは他のどんな問題よりも、はるかに重大なことなのである」と。

カーソンの道徳哲学の基礎は、「生命はわれわれの理解を超える奇跡である。そして、たとえそれに対して、われわれが戦わなければならない場合でさえ、生命あるものに畏敬の念を持つべきである」。このようなジュヴァイツァー的態度は、「自然のバランスを人間に有利な方向へと導く」というカーソンの言葉に大局的な認識を与えている。つまり、あらゆる生命体と同じように、人間も食物、避難所、生息地を得るために戦わなければならない、ということである。昆虫は時々、このような戦いを人間に挑んでくる。殺虫剤は人間の最新の答えだった。

しかしカーソンの意見では、その戦いは危険なレベルまでエスカレートした。彼女の本は自然を支配し、制御する力が増大化してくることは、逆効果であるかもしれないことを理解させた。人間に必要なことは、彼女が「謙虚さ」と呼んでいるものであり、また、「われわれの地球を他の生物とともに分かち合うこと」を主張する倫理なのである。人間の幸福は危うい状態にあるが、この同じ惑星に生きている他の仲間たちの幸福も危険にさらされていることを『沈黙の春』は教えてくれた¹⁴。

第九に「環境的正義」思想の登場と展開についてである。「環境的正義」思想の源泉には、1960年代から活発化した黒人差別に対する市民運動を起点とした公民権運動、ベトナム反戦運動、先住民への差別に対する抗議運動・権利回復運動がある。こうした市民運動は人間としての権利を回復するための「社会的正義」思想が根底にみられる。「環境的正義」思想の誕生の背景には、アメリカにおける社会的な人種差別を基盤とした、白人マジョリティによる有色人種マイノリティへの環境汚染活動を通じての差別、すなわち、有害廃棄物の処分場が黒人を中心とした、マイノリティの居住地域に集中して立地されたという「環境人種差別」が存在したことがあげられる。このことは、「豊かな者が破壊し、貧しい者が被害をこうむる」という環境的不正義を行ってきた白人マジョリティへの異議申し立てと有色人種マイノリティの環境的正義を回復していくための政治的意思表示としての性格がある。こうした環境正義論とリンクする形で登場するのがカーソンの『沈黙の春』であった。同書によって、人工化学物質や農薬などが環境や生態系に与える悪影響が主張されて、一般大衆が関心を寄せるようになった¹⁵。

4 カーソンの環境政治学的意義

最後に、カーソンの環境政治学における意義について述べる。

第一に、環境派といわれるゴアアメリカ元副大統領は、次のように述べる。「わが家では、食卓で本を読み、話し合うという母の教育方針だった。私も姉妹もそれが嫌いだったが、『沈黙の春』は別だった。あの本は、私が環境問題に関心を持つようになった理由の一つだ」。

そして次のようにも述べている。「わが家の農場から私は自然の営みについて多くのことを学んだ。また、夕餉の食卓で学んだ教訓も重要だった。1962年に母が、レイチェル・カーソン女史がDDTや殺虫剤について書いた古典的名著『沈黙の春』を初版で読んで、非常に憂えていたこと覚えている。母はカーソン女史の警告を読み、それを周りの人々に伝えた。母は、姉や私にこの本が極めて重要な本だと教えてくれた。この時の母や姉との会話を私は昨日のこのように覚えている。土壌流失より深刻な問題が、目に見えない形で環境への脅威となっていることに初めて気がついたからである」¹⁶。

第二に1970年にアメリカ環境保護局(EPA)が発足した。EPAは一冊の本と1枚の写真のおかげでできたと言われている。それは、『沈黙の春』と、1968年にアポロが撮った、宇宙に浮かぶ地球の写真である。『沈黙の春』が取り上げた残留性の高い有機塩素系農薬や、急性毒性の強い有機リン剤のほとんどは、使用禁止になった¹⁷。

第三に「グリーンへの批評」をフォローする。多くの人が、カーソンの著書『沈黙の春』の初版が出された1962年を、現代の環境運動の始まりの年としてきた。この本がグリーン派の政治の性質と発展に強い影響力を発揮したことは疑うべくもない。彼女のこの本は、殺虫剤、殺菌剤、除草剤などの化学薬品が見境なく土壌に使用されていることを教え、そして後々まで続く環境へのダメージを警告している。この主題とグリーン派の関心は明白なつながりがあるが、それ以上に、『沈黙の春』の抑制された感情と徹底した科学的調査の巧みな混合は、その後に続いたグリーン派の政治活動の大部分の作風を定めもした。「地球の友」のような組織は、その成功の多くを、カーソンが見事にその模範を示したキャンペーン文書作りの技法に負っている¹⁸。

第四に「エコロジー的思考の拡散(死の灰と『沈黙の春』)」についてである。1950年代において、アメリカ国民の注目を集めることになった「最初の環境問題」は、核実験による放射性降下物、すなわち「死の灰」に関する問題であった。1950年代後半から1960年代初頭にかけて、アメリカでは核実験の恐怖を描いた本や映画がヒットし、「死の灰」に含まれている発がん性物質が粉ミルクから検出されるという事件が発生した。その中で、米ソ両国は核実験を再開し、1960年代初頭において、アメリカ国民の間における「死の灰」への恐怖は増大した。

カーソンの『沈黙の春』が出版されたのは、米ソの対立が深まっていた1962年6月、人類が核戦争の一手手前まで近づいたとされるキューバ危機の数か月前のことである。同書では、DDTやその他の化学物質が自然界や人体に与える悪影響に関して明瞭かつ詩的な文章でつづられ、自然破壊と健康への脅威が密接に関連している事態が明らかにされていた。『沈黙の春』はその出

版から半年の間に50万部を売りつくすベストセラーとなり、当時のアメリカ社会にセンセーションを巻き起こした。同書が脚光を浴びた背景として、既述のアメリカ国民の間での「死の灰」への恐怖の高まりが指摘される。『沈黙の春』でカーソンは、核実験にともなう「死の灰」が、人間には分明でない複雑な経路を通じ、しかも誰もが知らないうちに自然界や人体を蝕んでゆくという問題の構図を、有毒化学物質汚染のコンテキストで描いた¹⁹。

第五に、環境政治の中心的出来事であるJ・F・ケネディとカーソンの関係を述べる。

1960年の秋、カーソンはケネディの選挙を応援する心身の余裕があった。カーソンは民主諮問委員会の自然資源委員会の委員を務めるよう誘われていた。新しい民主党政権が有毒汚染問題にもっと配慮して、政府、産業、農業の研究の優先順位を変えることを期待して、カーソンはその依頼を受けた。「しかし、ちょっと健康上の問題もありますし、なによりも、とても大切な本を書くという責任があるので、かぎられた範囲でしかお手伝いできません」と、カーソンは述べた。「でも、できるかぎりのことはしたいと心から思っています」。

カーソンは当時の共和党政権の害虫駆除プログラムを非難して、次のように勧告している。すなわち、いかなる駆除プログラムも開始する前に散布によって影響を受ける人々の意見を聞くこと、予定されている使用条件での化学物質の影響について十分な研究が実施されていない場合はプログラムを延期すること、新しい化学物質の開発よりも代替法へ研究の方向を変更すること、である。

カーソンの見解と言葉は、委員会の、汚染防止に関する報告書にとりあげられた。委員会は、公衆衛生局のなかに環境健康局を設立して「かけがえのない資源・我々みんなが住んでいる環境」に関して規制する権限を与えるよう勧告した。

カーソンが委員会に貢献したことに謝意を表して、民主党全国委員会は、1961年1月に著名婦人就任披露会への招待状をカーソンに送った。カーソンは同会へは出席したが、就任舞踏会には参加しなかった。またカーソンはケネディから個人的な令状を受け取った²⁰。

以上を踏まえると、次のような展望が描けるのではないか。すなわち、アメリカにおける農薬規制問題をめぐって環境政治学的なアプローチを試みる場合、いくつかの重要なアクターが浮かび上がる。重要な人物は言うまでもなくR・カーソンであり、J・F・ケネディ大統領、農薬会社、大統領科学諮問委員会、農務省、などであろう。農薬規制の反対派、賛成派、を中心とした対立・妥協の末、徐々に規制派が優位を占めるようになり、農薬散布の規制がさらに厳しくなっていく。こうしたテーマの意思決定過程の詳細な研究が、今後望まれる。

いずれにしても、この問題におけるカーソンおよび『沈黙の春』の果たした役割の大きさは想像するに余りある。

〈注〉

- ¹ 岡島成行『アメリカの環境保護運動』岩波新書、1990年、144～147ページ
- ² レイチェル・カーソン(青樹築一訳)『沈黙の春』新潮文庫、1974年、17、23ページ
- ³ John McCormick, *The Global Environmental Movement*, the second edition, John Wiley & Sons, 1995, pp.65-67. 石弘之・山口裕司訳『地球環境運動全史』岩波書店、1998年、64～67ページ
- ⁴ 太田哲男『レイチェル＝カーソン』清水書院、1997年、170ページ
- ⁵ R・E・ダンラップ、A・G・マーティグ編(満田久義監訳)『現代アメリカの環境主義—1970年から1990年の環境運動—』ミネルヴァ書房、1993年、130ページ
- ⁶ レイチェル・カーソン、前掲訳書、243ページ
- ⁷ 海上知明『環境思想—歴史と体系—』NTT出版、2005年、81～82ページ
- ⁸ R・F・ナッシュ編著(松野弘監訳)『アメリカの環境主義—環境思想の歴史的アンソロジー』同友館、2004年、264～268ページ
- ⁹ 松野弘『環境思想とは何か—環境主義からエコロジズムへ—』ちくま新書、2009年、95～96ページ
- ¹⁰ J・R・マクニール、海津正倫・溝口常俊監訳『20世紀環境史』名古屋大学出版会、2011年、268ページ
- ¹¹ Andrew Dobson, *Green Political Thought*, Second Edition, Routledge, 1995, p.36 A・ドブソン著、松野弘監訳『緑の政治思想—エコロジズムと社会変革の理論—』ミネルヴァ書房、2001年、51ページ
- ¹² ジョイ・A・パルマー編、須藤自由児訳『環境の思想家たち(下)—現代編』みすず書房、2004年、69～81ページ
- ¹³ ロデリック・F・ナッシュ著、松野弘訳『自然の権利—環境倫理の文明史』ミネルヴァ書房、2011年、122～124ページ
- ¹⁴ 同書、125ページ
- ¹⁵ 松野弘『現代環境思想論』ミネルヴァ書房、2014年、151ページ
- ¹⁶ Albert Gore, *Earth in the Balance. Forging A New Common Purpose*, Earthscan Publications, 1992, p.3 アル・ゴア著、小杉隆訳『地球の掟—文明と環境のバランスを求めて』ダイヤモンド社、1992年、6ページ
- ¹⁷ 朝日新聞社『100人の20世紀(上)』朝日新聞社、1999年、80～81ページ
- ¹⁸ A・ドブソン編著、松尾眞ほか訳『原典で読み解く環境思想入門—グリーン・リーダー—』ミネルヴァ書房、1999年、15ページ

- ¹⁹ 及川敬貴『アメリカ環境政策の形成過程—大統領環境諮問委員会の機能』北海道大学図書刊行会、2003年、55～56ページ
- ²⁰ Linda Lear, *Rachel Carson, Witness for Nature*, 1997. リンダ・リア（上遠恵子訳）『レイチェル—レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』東京書籍、2002年、537～538ページ